

『栄花物語』における中関白家

——書かれること、書かれないこと——

(キーワード…王朝歴史物語、人物造型、歴史叙述、頼通文化圏、執筆背景)

小島 明子

はじめに

『栄花物語』はごく端的に説明するならば藤原道長が政権を掌握し、繁栄を極めるさまを詳細に描く歴史物語である。しかし、当然ながらその蔭で道長に敗れて失意に沈む人々も少なくないのであり、その姿もまた活写されている。その中で最も重視されるのは、道長の長兄・道隆の一門「中関白家」であろう。特に道隆の息子である伊周・隆家、道隆の娘で一条天皇の中宮となった定子、そして定子が産んだ親王・内親王たちを描く記事は、かなりの分量を有し、記載の質も高い。『栄花物語』作者が中関白家に大きな関心を寄せていたことは疑いない。

本論文は、『栄花物語』の中関白家の描写を抽出・分析し、その叙述に見られる特徴を明らかにするものである。また『栄花物語』では、この中関白家に関して書かれるのが当然と思われる記事が欠落している場合もあり、その意図にも検討を加える。中関白家について「書かれること」と「書かれないこと」の双方を考察することによって、『栄花物語』の歴史叙述の方向性の一つを浮かび上がらせてみたいと考える。

ただし『栄花物語』は、正編(巻一～三十)と続編(巻三十一～四十)では、成立時期も作者も異なるものであり、今回の歴史叙述の検討においては正編のみを取り扱う。

一 正編全体の見取り図

さて、『栄花物語』正編は約百四十年の歴史を描くが、今回あらためてその正

編全体を見わたして気づかされたのは、巻ごとの叙述範囲の大きな偏りであった。以下それを表にしたものを参照されたい。

巻	巻頭年次	巻末年次	叙述期間	期間合計
巻一	八八七年	九七二年	約八十五年	計 約九十九年
巻二	九七二年	九八六年	十四年十か月	
巻三	九八六年	九九一年	四年九か月	計 約三十三年
巻四	九九一年	九九六年	五年一か月	
巻五	九九六年	九九八年十二月	二年九か月	計 約三十三年
巻六	九九九年	一〇〇〇年	十か月	
巻七	一〇〇〇年	一〇〇二年	二年	計 約三十三年
巻八	一〇〇三年	一〇一〇年	七年余	
巻九	一〇一一年	一〇一一年	五か月	計 約三十三年
巻十	一〇一一年	一〇一三年	二年六か月	
巻十一	一〇一三年	一〇一四年	一年	計 約三十三年
巻十二	一〇一四年	一〇一七年	二年九か月	
巻十三	一〇一七年	一〇一八年	十か月	計 約三十三年
巻十四	一〇一八年	一〇一九年	一年	
巻十五	一〇一九年	一〇一九年	八か月	計 約三十三年
巻十六	一〇一九年	一〇二二年	三年三か月	
巻十七	一〇二二年	一〇二二年	三日	計 約三十三年
巻十八	一〇二二年	一〇二三年	八か月	
巻十九	一〇二三年	一〇二三年	五か月	計 約三十三年
巻二十	一〇二三年	一〇二三年	五か月	

卷二十	一〇二三年 十月	一〇二三年十一月	二か月
卷二十一	一〇二三年十二月	一〇二四年 三月	四か月
卷二十二	一〇二四年 三月	一〇二四年 六月	四か月
卷二十三	一〇二四年 九月	一〇二四年十二月	四か月
卷二十四	一〇二五年 一月	一〇二五年 三月	二か月
卷二十五	一〇二五年 三月	一〇二五年 八月	六か月
卷二十六	一〇二五年 八月	一〇二五年 八月	一か月
卷二十七	一〇二五年 八月	一〇二六年 九月	一年二か月
卷二十八	一〇二六年 十月	一〇二七年 四月	七か月
卷二十九	一〇二七年 四月	一〇二七年 十月	七か月
卷三十	一〇二七年 十月	一〇二八年 二月	五か月
計			
約九年			

第一ブロックの巻一・二は、巻の平均が四十九・五年、第二ブロックの巻三～十四は巻平均が二・七五年、第三ブロックの巻十五～三十は巻平均が約〇・五六と著しい差異がある。『栄花物語』正編の成立は長元二年（一〇二九）～六年（一〇三三）の間とされるが、その時点から遠い巻の叙述は梗概的なものであるのに比して、成立年次に近い箇所はきわめて詳細なものと変わっていくことが見て取れる。

ちなみに、第一ブロックの巻一は第五十九代宇多天皇から、醍醐天皇、朱雀天皇、村上天皇、冷泉天皇、円融天皇までの六代の御世がごく簡略に描かれ、巻二は、円融天皇に関する残りの記事から、次の花山天皇の御世に繋げる。もともと花山天皇の在位はきわめて短期間で幕が閉じられ、第六十六代一条天皇の即位が巻末に置かれている。

続く第二ブロックの巻三では一条天皇の外祖父・兼家の摂政就任から始まり、兼家の子息の一人として道長も物語世界に初めて単独で紹介される。こうして見れば、第一ブロックは道長登場前史ということになる。そして第二ブロックでは道長の政権が確立するさまが順次描き出されてゆき、道長の三女威子が長女彰子・次女妍子に続いて立后し、一家から三后が立つという記事を含む巻十四に至る。つまりこのブロックは、道長の権力基盤の確立期として大きく捉えることができる。

そして第三ブロックにおいては、権力を掌中にした道長の繁栄のさまが描かれる。と同時に、その宗教生活に軸足が移され、道長薨去を配した巻三十で正編が

終了する。なお、この第三ブロックがそれ以前とは異なる描出方法をとることは、夙に諸氏の指摘するところで、小学館『新編日本古典文学全集 栄花物語①』解説はこの巻十五～三十を「道長の人生史の「コマ」コマが独立して各巻を形作り、出来事の細部の肥大化が顕著になっている」とまとめている。

ここで参考までに後続の歴史物語を眺めてみたいのであるが、『大鏡』『今鏡』が紀伝体で描かれるのに対して、『栄花物語』と同じ編年体を採用した『増鏡』においては巻の叙述範囲（足かけの年数）は以下となっている。

卷一	三十九年	卷二	三十三年	卷三	十九年	卷四	二年
卷五	十四年	卷六	四年	卷七	九年	卷八	六年
卷九	三年	卷十	十一年	卷十一	十八年	卷十二	十一年
卷十三	七年	卷十四	四年	卷十五	六年	卷十六	一年
卷十七	半年						

『増鏡』の執筆年次は元弘三年（一一三三）六月以降、永和二年（一一七六）四月以前の間で研究者によって見解が分かれているものである。『増鏡』（古本系）全体としては百五十三年間の歴史を叙し、ほぼ『栄花物語』正編の叙述期間と等しい。『増鏡』十七巻で平均すれば一巻はおよそ九年を描くが、冒頭の二巻（巻一・二）の叙述範囲が長く、末尾の二巻（巻十六・巻十七）が短い叙述範囲であるのは『栄花物語』と近いものがある。ただ全体としては『栄花物語』のように三ブロックに大別されるような特徴はなく、巻の内容に即して長短があるという程度のばらつきであろう。その結果、『増鏡』は全巻を通して穏やかな表現によって鎌倉時代の宮廷生活を淡々と描き出すものとなっている。鎌倉時代は前半には承久の変、後半には元弘の変があり、天皇とそれを取り巻く公家社会が大きな変化を遂げていたという歴史的事実がありながら、『増鏡』の叙述はその歴史的事実に見合うほどの盛り上がりを作り得ているか、いささか疑問なのである。

一方、前述のように『栄花物語』正編では三ブロックそれぞれに叙述の傾向が異なる。そして、『栄花物語』が同じ編年体の歴史物語でも『増鏡』などと異なる個性を生み出すのは、第二ブロック・第三ブロックに拠ると思われる。

まず第二ブロック（巻三～十四）においては、『栄花物語』が『紫式部日記』を原資料としたことが明らかな巻八「はつはな」の記事が殊に示唆的であろう。この巻の『紫式部日記』撰取については古くから言及がなされているが、近年『栄花物語』の新伝本との関わりで、道長女の中宮彰子が敦成親王を出産する前後の

記事が殊に注目されているところである。^(注1)

既に周知のことながら、一箇所のみ『栄花物語』とその原資料となった『紫式部日記』を並べて以下に挙げる。寛弘五年(一〇〇八)九月十五日、敦成親王の五日の産養を記す箇所である。

『栄花物語』卷八「はつはな」(四六)

「女房、盃」などあるほどに、いかがはなど思ひやすらはる。

めづらしき光さしそふ盃はもちながらこそ千代をめぐらめ

とぞ、紫ささめき思ふに、四条大納言簾のもとにあたまへば、歌よりも言ひ出でんほどの声づかひ、恥づかしさをぞ思ふべかめる。

『紫式部日記』当該箇所^(注2)

「女房、さかづき」などあるをり、いかがはいふべきなど、くちぐち思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代をめぐらめ

「四条の大納言にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意するべし」など、ささめきあらそふほどに、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきても指さでまかでたまふ。

一人称で語られる『紫式部日記』が、紫式部が「紫」と三人称で語られる『栄花物語』へ書き換えられる。『紫式部日記』では、当代の随一の文化人である四条大納言・公任の前で歌を提示するにあたり、歌そのものもさることながら「声づかひ」に気後れしているのが複数の女房たちであるのに対して、『栄花物語』で描かれているのは「紫」一人である。むろん彰子の代表的な女房として紫式部は物語世界に登場させられているのではあるが、公任の存在に臆するその姿は少なからず矮小化されていると言えないだろうか。

紫式部の没年は未詳であるが、『栄花物語』正編が作られた時期には、仮に存命であってもその晩年にあたることは疑いなく、宮仕えからも引退していたことであろう。そうした条件が、かの『源氏物語』の作者である紫式部であっても、それを相対化して描くことを可能にしたと考えられる。第二ブロックの『栄花物語』記事は、原資料をかなり自在に「加工」できたのであった。

さらにもう一例、第二ブロックの記事を見たい。寛仁二年(一〇一八)十月十六日、皇太后妍子、中宮威子の宣旨が出て、太皇太后となっていた彰子を含め、道長の三人の女が立后するという歴史的にも画期的なくだりで、『栄花物語』では卷十四「あさみどり」(二六)に位置する。

寛仁二年十月十六日、従三位藤原威子を中宮と聞えさす。あさせたまふは

どの儀式有様、ささぎきの同じことなり。もとの中宮(妍子)をば皇太后宮と聞えさす。尚侍には、弟姫君(嬉子)ならせたまひぬ。中宮大夫には法住寺の太政大臣(為光)の御子の太納言の君(齊信)なりたまひぬ。権大夫には権中納言の君(能信)なりたまひぬ。次々の官司、ささぎきのやうに競ひ望む人多かるべし。今はこたいのことなれど。

かくて后三人おはしますことを、世にめづらしきことにて、殿の御幸ひこの世はことに見えさせたまふ。この御前たちのおはしまし集まらせたまへるをりは、ただ今もの見知り、古のことおぼえたらむ人に、物の狭間よりかいはせたまつらばやとまでぞ、思されける。

煩瑣ながら全文を引いたが、この立后記事では饗宴についての記事が皆無である。『栄花物語』記事は、立后に伴う人事を語った後、道長の幸いを抽象的に賛美しているものの、それほど詳細でなくまとめられている。そこには、以下の『小右記』(寛仁二年十月十六日条)が記す後世に著名な道長の歌も書き留められることはない。

太閤招呼^三下官^二云、欲^レ読^二和哥^一、必可^レ和者、答云、何不^レ奉^レ和乎、又云、誇^二哥^一に^レ有^レる、但非^二宿構者^一、此世^二望月^一乃^レ虧^二事^一無^レ思^二余^一、余申云、御歌優美也、無^レ方^二酬答^一、満座只可^レ誦^二此御哥^一、元稹菊詩、居易不和、深賞歎、終日吟詠、諸卿響^二余言^一、数度吟詠、太閤和解、殊不^レ責^二和^一、……

もつとも『御堂関白記』(寛仁二年十月十六日条)もまた、これに相当するくだりは次のように実にあつさり^(注3)と記すのみであった。

又階下召^二伶人^一数曲、数献之後給^レ禄、大樹一重、於^二此余読^二和哥^一、人々詠^レ之、事^レ了分散、……

『栄花物語』がこの箇所の『小右記』を参照することが可能であったかは不明であるが、満座の中で詠まれた道長の歌について、それが書承であれ口承であれ、その存在あるいは歌句を知ることが皆無であったとは考えにくい。一般には記事の中に和歌を採用することを好む『栄花物語』がこの道長歌を採らなかつたのは、書き残すことを躊躇する理由があつたからではないか。あまねく人々を思いやり、人々に愛されつつ、人臣最高の身位と政治的を得た道長像を描き出すのが『栄花物語』である。『小右記』が記す道長の歌は、『栄花物語』の作者にはその人物造型に齟齬するものを含むと捉えられていたとみるのが妥当ではないかと考えている。^(注4)

ここまで第二ブロックの二箇所を取り上げたが、先の卷八「はつはな」に関し

ては原資料『紫式部日記』の「加工」という点に言及し、巻十四「あさみどり」については「取捨選択」がなされていたらしい点を確認した。原資料が今日まで現存している場合、同一の行事を書き記す資料に恵まれた場合という限られた条件下の『栄花物語』記事を取り上げたに過ぎないのであるが、おそらく同様の原資料の扱いが他の箇所にも散見したと類推されるのである。

そして、それとまさしく対照的な傾向が第三ブロック（巻十五〜三十）で指摘できる。例えば、巻二十四「わかばえ」は、万寿二年（一〇二五）正月二十三日の中宮妍子大饗を詳細に描き出しているのであるが、そこに次のような奇妙な記事が割り込んでいる。

まことや、弁の乳母の姪こそは今日やがて大人になさせたまへば、殿ばらなど参り集まりたまひぬれば、まづ中宮大夫殿（＝斉信）は、台盤所の方より入らせたまひて、裳の腰結はせたまひけり。（一二二）

弁の乳母は妍子と三条天皇の間に誕生した禎子内親王の乳母であるが、その姪という、身分もさほど高いわけでも、この大饗において重要な役割を果たすわけではない女性の裳着の記事が途中に配され、大饗記事が一時的に中断させられている。この記事がここに挿入されている文学的意図を汲み取ることは難しい。

また今一つ、万寿四年（一〇二七）三月、禎子内親王が東宮・敦良親王に入侍する巻二十八「わかみづ」の記事を挙げる。

○（禎子内親王は）上らせたまへど、動きもせさせたまはねば、上出でさせたまひて、御帳の内にかき抱きて入らせたまひぬ。（一二三）

○四月九日にぞ、上この御方へ渡りはじめさせたまふべかりける。……上の女房、女官、下仕などまでのこと、さきさきの御有様なるべし。（一二七）

数箇所「上」の語が使われているが、これは文脈から言って万寿四年時点の天皇である後一条ではなく、東宮・敦良親王であることは明らかである。ここは、東宮が即位して後に書かれた禎子内親王入侍の記録、あるいは東宮を「上」と呼んでいた記録、こうした原資料を『栄花物語』はそのまま取り込んでしまったと『新編日本古典文学全集』頭注は指摘する。

第三ブロックでは、これらのように原資料が十分に「加工」あるいは「取捨選択」という一種の咀嚼を経ることなく、そのまま『栄花物語』の中に埋め込まれた箇所がかなりあったのではないか。このブロックの巻々が、一巻の叙述範囲がきわめて短く、諸行事を微に入り細に入り描写しているのは、そうした箇所が相当数に及んだことに拠ると考えれば領けるところ大である。

以上、『栄花物語』の三ブロックの内、特に第二・第三ブロックのそれぞれの

特徴を概観したが、その差異の要因はやはり『栄花物語』が書かれた時期からの年次の隔たりであるとみるのが妥当であろう。原資料の作者、あるいは原資料の提供者への気遣い・遠慮の多寡は、『栄花物語』の叙述を大きく規定するものであったことと言える。この点を踏まえつつ、次章以降、中関白家の描写の検討に移ることにする。

二 描かれる中関白家——物語の時間操作

中関白家の人々の人物造型については、以前に拙稿『栄花物語』の叙述方法——道長政権成立までの道筋——（『鳴門教育大学紀要』三十四巻、二〇一九年三月）で道隆とその男・伊周を中心にしたその特徴に言及しているため、本稿はそれとは異なる視点から分析する。ちなみに『栄花物語』における中関白家の記事は、大多数が前章で示した第二ブロックに位置している。

まず、長徳二年（九九六）〜四年（九九八）を叙述範囲とする巻五「浦々の別れ」を取り上げるが、長徳元年（九九五）関白道隆が四十三歳で薨去したことが前巻で描かれ、当該の巻五に続いている。長徳二年に伊周（二十四歳）・隆家（十八歳）に配流の処分が下るといふ著名な箇所である。『栄花物語』ではその罪名として、花山法皇を射たこと、一条天皇の母女院・詮子を呪詛したこと、私に太元帥法を行ったことの三点が挙げられている。

この配流関係記事について『栄花物語』では独自の時間設定がなされている。

	『小右記』などの 歴史資料	『栄花物語』
伊周・隆家に配流の宣命が下る	四月二十四日	四月二十二日
伊周、逃亡	四月三十日（逃亡）	四月二十二日夜
二条第を検非違使が搜索	五月一日（発覚）	四月二十三日
中宮定子、自ら出家	五月一日	四月二十四日
伊周、帰宅	五月四日	四月二十三日夕
伊周・隆家、配所に出立	五月四日	四月二十四日

既に検討がなされてはいるが、稿者なりに整理するため、『小右記』などで確認される歴史的事実と『栄花物語』を対比させたものが前ページの表である。^(注1)
 史実では、検非違使が二条第を包囲してから、伊周・隆家が配所に出発するまでおよそ十日といささか間が空くのであるが、『栄花物語』はそれを三日に圧縮している。その結果、配流は史実に比してより緊迫した時間経過の事態として物語化されることになる。

また、この中で、伊周・隆家と母を同じくする中宮定子は自ら出家する。ただし、史実では検非違使が二条第を捜索する中で髪を切るのだが、『栄花物語』では伊周・隆家が各々の配所に向けて出立してから出家したという展開に変えられている。単独では推測しにくいだが、両者を比較してみると、定子出家の意味の相違がおぼろげに透けて見えてくるように思える。史実通りならば、身分賤しき検非違使が事もあるうに中宮の住まう二条第に踏み込む無礼への定子の強い抗議の思いが感じられる。むろんそうした事態を引き起こすに至った運命への絶望もそこにはあろう。これに比して、『栄花物語』でこのくだりを読む場合は、父の薨去後、後見と頼む同母兄弟を失う定子の心細さ、悲嘆の方が強調されてくる。定子は、どちらかと言えば線の細い女性として印象づけられるのである。

『小右記』などの歴史資料		『栄花物語』	
長徳三年(九九七)	女院詮子の病平癒を祈り、非常の恩赦	三月	親王出産
四月五日	伊周・隆家召還の宣旨下る	四月	伊周・隆家召還の宣旨下る
四月二十二日	隆家、入京	三月	中宮定子、敦康
十二月	伊周、入京	五月三四日	隆家、入京
		十二月	伊周、入京
長保元年(九九九)	中宮定子、敦康親王		
十一月七日	出産		

さらに伊周・隆家の帰京について史実と物語の相違を確認すると、上段の表のようにまとめられる。

これも一言で言えば、先の箇所と同じく時間の経過の圧縮であるが、そのみに留まらず、出来事の因果関係にも大きな変化が見られる。史実では伊周・隆家が召還されたのは、女院詮子の病氣平癒を祈る恩赦によるのであるが、『栄花物語』は、召還の理由を中宮定子が敦康親王を産んだことと設定し、大きく物語化をなしている。

この恩赦が決まるくだりの『栄花物語』巻五「浦々の別れ」(四五)は以下である。

(一条天皇は)かかるほどに、今宮(二敦康親王)の御事のいといたはしければ、いとやむごとく思さるるままに、「いかで今はこの御事の験に旅人を」とのみ思しめして、つねに女院と上の御前と語らひきこえさせたまひて、殿(二道長)にもかやうにまねびきこえさせたまへば、「げに御子の御験ははべらむこそはよからめ。今は召しに遣はさせたまへかし」など、奏したまへば、上いみじううれしう思しめしながら、「さはさるべきやうにともかくも」とのどやかに仰せらる。

敦康親王の父・一条天皇と天皇の母女院だけでなく、道長までも、定子が敦康親王を産んだ「御験」に伊周・隆家を召還させることに積極的に同意する発言をなしている。時間経過の入れ替えをなすことに伴って道長の発言が創作され、「敵対していた中関白家の人々にも寛大な道長」という人物造型が強い裏付けをもって物語世界に提示されることになるのである。

次に、巻五「浦々の別れ」とは異なり、これまで言及されることが少なかった巻七「とりべ野」に目を向ける。この巻は、長保二年(一〇〇〇)～四年(一〇〇二)叙述範囲とし、前巻の巻六「かかやく藤壺」において、道長女彰子が一条天皇に入内、長保二年(一〇〇〇)三月に女御彰子が中宮、中宮定子は皇后となり、一帝二后並立の状態が出現するという記事を受けている。巻七「とりべ野」に含まれる記事の主要なものとして歴史資料を対照させたものが次の表である。

長保二年(一〇〇〇)	『小右記』などの歴史資料	『栄花物語』
七月	道綱室、出産・逝去	
十二月	定子、嬖子出産、崩御	十二月 定子、嬖子出産、崩御

長保三年 (一〇〇一)	史実・寛弘元年(一〇〇四) 夏 ↓ 詮子、嬖子を引き取る 道長、病癒 〔綏子〕旧邸に転居、平癒	詮子、嬖子を引き取る
長保四年 (一〇〇二)	六月 道隆四女御匣殿、逝去 八月 道隆次女原子、逝去	九月 詮子、法華八講 十月 詮子、四十の賀 十月 詮子、石山詣 閏十二月 詮子、病癒 一条天皇、行幸 詮子、崩御
	夏 ↑ 〔綏子〕旧邸に転居、平癒 道綱室、出産・逝去	九月 詮子、石山詣 九月 詮子、法華八講 十月 詮子、四十の賀 十二月 詮子、参内と退出 一条天皇、行幸 詮子、崩御
	↓ 卷八・寛弘元年(一〇〇四) 八月 道隆次女原子、逝去	

『栄花物語』巻七「とりべ野」の長保二年(一〇〇〇)記事は、十二月に定子が嬖子内親王を出産、そのまま崩御に至る記事から始まり、一条天皇をはじめ人々の嘆きが詳細に記される。史実では同年夏の道長の病癒(波線を付す)、同年七月の道綱室の出産・逝去(二重傍線を付す)は、表に示したように翌長保三年(一〇〇一)に移されて記載される。つまり、巻七が描く長保二年は、定子追悼の記事に焦点が絞られているのである。

続く長保三年で『栄花物語』において注目すべきは、道長の異母妹・綏子(居貞親王女御)の薨去記事である。史実では綏子が世を去ったのは寛弘元年(一〇〇四)二月(綱掛け部に示す)で、今少し後年である。『栄花物語』では、道長が病となって綏子邸に転居したところ平癒するという流れが作られ、その邸の持ち主はもはや亡くなっていると説明づけて、綏子の薨去がこの位置に配されたと思しい。ある一つの記事に関連する別の事柄が、本来の年次を外れて物語世界に呼び込まれ記載されてゆくことが明らかにわかる好例である。

また、この長保三年では、詮子に関わる三つの大きな行事が史実では「法華八講」「四十の賀」「石山詣」の順に展開するが、それも『栄花物語』で「石山詣」「法華八講」「四十の賀」の順に変えられている。非常に些細な改変ではあるが、『栄花物語』では「石山詣」において、残り少ない寿命を自覚して嘆く詮子の姿

が描かれ、一転、「法華八講」「四十の賀」で最後となる輝かしい盛事の中に詮子の姿が書き留められる。道長栄花の実現に功績甚大であった同母姉・詮子は、荘厳された上で世を去るという構成を物語は仕組むのである。

さらに、歴史的には長保四年(一〇〇二)に、道隆の二人の女が相次いで世を去っている。ところが『栄花物語』は、次女の原子(居貞親王女御)の逝去のみを巻七末に描き、四女御匣殿の逝去記事は巻八の寛弘元年(一〇〇四)を描く箇所に移している。御匣殿は、姉・定子が残した脩子内親王・敦康親王・嬖子内親王の母代の役目を果たし、やがて一条天皇の寵を受け懐妊したが、産み月に至らず世を去るという生涯であったらしい。この顛末を長保四年に描くことは、『栄花物語』作者にとつて躊躇されるものであったことは容易に推測できる。巻七「とりべ野」は、一条天皇にとつて掛け替えのない后・定子と母・詮子の二人の崩御を哀切に描くことに終始したいところで、一条天皇のかりそめの寵愛を受けた御匣殿の死は、少なくとも巻七においては夾雑物であり、他の巻に移されたのも無理からぬものがある。

こうして巻七「とりべ野」を見てくると、この巻は巻五「浦々の別れ」とまさしく重なる方法によって形作られていることがわかる。出来事の進行時間の圧縮や、時間経緯の入れ替えは、『栄花物語』の顕著な手法と言えるが、巻五・巻七の中関白家の描写において、道隆亡き後の一家の悲しい運命をより劇的に物語化することに大きな効果を上げているのであった。

三 書かれなかった中関白家

実を言えば『栄花物語』の中で政治的な敗者は中関白家のみではなく、これらの敗者は物の怪(邪気)として繰り返し物語に登場している。まず挙げられるのは藤原元方で、その女祐姫が村上天皇の第一皇子・広平親王を産むものの、九条流の藤原師輔の女・安子から第二皇子・憲平親王が誕生し、冷泉天皇として即位、元方は失意のまま死去する。その後、次の場面で三度、物の怪として姿を現すことになる。

- 憲平親王、物の怪に苦しむ(巻一〔二五〕)
 - 憲平親王の母・安子、選子内親王出産、病癒、崩御(巻一〔三六〕)
 - 冷泉院の女御・超子の頓死(巻二〔三五〕)
- また、藤原顕光・延子の父娘は、さらに強力な物の怪として物語に現れている。延子は三条天皇の皇子・東宮敦明親王の女御であり、皇子にも恵まれていた。と

ころが、後一条天皇の後に即位予定であった敦明親王は突然東宮を辞し、東宮位は後一条の弟・敦良親王(のちの後朱雀天皇)に移る。言うまでもなく、後一条・後朱雀の両帝は道長の女彰子と一条天皇の間に生まれた皇子たちで、顕光・延子の物の怪は以下の場面で執拗に道長の女たちに憑くさまが描かれる。

○道長女・寛子の病悩・出家、死去(巻二十五(一三二))

○道長女・尊子病悩(巻二十五(一四四))

○道長女・嬉子(東宮敦良親王妃)、出産前の病悩(巻二十五(二四四))

○道長女・妍子病悩(巻二十九(五))

その他、『栄花物語』には正体不明の物の怪も数多いが、不思議なことには本来『栄花物語』の人物の内、最も物の怪となりそうな中関白家の人々は意外に少ないのである。例外は以下の二つの場面であろう。

○巻二十一(三)〔四〕教通室出産、死去の場面

貴船のおはするといみじう恐ろしきことあれど……小松僧都(隆円)現れて「この加持とめよ」……殿「この物の怪のかくいふに、あるやうやあらん……」

○巻二十七(四五)後一条天皇の病悩の場面

さまざまの御物の怪どもいみじうこはし。関白殿(隆円)わたり、式部卿宮(敦康親王)さへ出でたまひて、いと恐ろしきこと多かるなかに、東宮の御乳母などの貴船に祈り申したるなどいふことさへ御物の怪申すを……

道隆、その男・隆円、定子が産んだ敦康親王の三人であるが、それぞれ描かれるのは一度限りである。同様にただ一度の出現ということなら、道長女・嬉子(東宮敦良親王妃)さえ以下のように名前が挙がる場面が見出せる。

また督の殿(嬉子)の御けはひにやと見ゆるもさし申させたまへれば、上の御前(倫子)あはれにいみじう泣かせたまふ。(巻二十九(五))

嬉子が物の怪とされるのは、嬉子死後、妍子の女の禎子内親王がその後釜として東宮敦良妃となったことによる。この嬉子の例を合わせて考えれば、道隆・隆円・敦康親王の物の怪は、先の元方や顕光・延子の父娘ほどには遺恨を含んだ存在とはされていないと言えよう。

しかも、道長に敗れ去った当の伊周(道隆男)や、所生の敦康親王が帝位に即くことなく終わった定子が物の怪となった描写は、『栄花物語』中に皆無である。これはなぜなのか。ちなみに貴族日記には、物の怪として伊周が現れたことを記

す記事は少なからずあるが、定子の名は見えないことを倉本一宏氏が指摘する。定子の名が記されない理由として、倉本氏は誰もがわかつている名前であること、また記すことが怨霊化に繋がるためそれを恐れたことの二点を挙げている。

前述の拙稿で論じた通り、『栄花物語』における伊周は蔑視や揶揄の対象となっていて、物の怪として描かれても不思議ではない人物に造型されている。一方、定子に対する描写を確認すると丁寧で手厚いものばかりである。そのいくつかの例を以下に挙げておく。

○巻五「浦々の別」(二二)一条天皇・女院詮子、定子を氣遣う場面

ただならぬ御有様に、かくさへならせたまひぬること、かへすがへす内にも女院にもいみじう聞こしめしおほす。

○巻五「浦々の別」(二二)女院詮子、定子の出産を氣遣う場面

上をかぎりなく思ひきこえさせたまふ御ゆかりにこそはと、ことわり知られたまふ。いみじうあはれにのみつねに嘆ききこえさせたまふ。

○巻六「かかやく藤壺」(一〇)定子・敦康親王らの参内に道長配慮の場面

一の宮参らせたまふ御迎へにとて、大殿(道長)の唐の御車をぞ率てまゐれる、それに宮も姫君もやがて奉れる。……殿の御心ざまあさましきまでありがたくおはしますを、世にめでたきことに申すべし。

○巻七「とりべ野」(七)定子の遺詠の場面

(三首の歌の提示)

○巻七「とりべ野」(八)定子葬送の場面

(定子の兄弟の歌三首・一条天皇の歌一首の提示)

ただし、巻六「かかやく藤壺」(一〇)の道長の好意的な態度の描写は史実になく、敵対する関係にあった者に対しても寛容で優しいとされる道長の美質を『栄花物語』が強調するためとも言える。また巻七「とりべ野」(七)〔八〕において、多数の和歌を提示することでなされる定子の賛美も、和歌資料に恵まれた偶然によるところが大きいとも見なし得る。だが、それらを差し引いて考えたとしても、方々による定子への配慮が丹念に描かれる『栄花物語』の描写を見れば、定子は物の怪になるとは考えにくい人物造型がなされているのである。

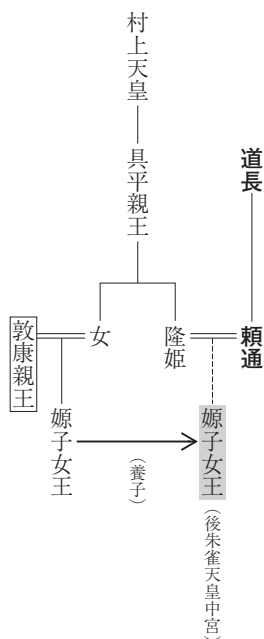
このように『栄花物語』における扱いが対照的とも言える伊周・定子であり、物の怪として描出されない背景はそれぞれに異なる。伊周についてはやはり倉本氏の言うように、怨霊化を恐れていたというあたりが妥当とも思われるものの、今のところそれ以上の考察に及んでいない。他方、定子に関してはいくつもの事情をさらに付け加えるべきであろうと思量する。

第一は、言わずもがなのことながら、中宮・皇后であった定子の身位と皇子女の母であることへの敬意である。わずか九歳で夭逝した媛子内親王は別として、敦康親王は一条天皇の第一皇子として、親王の最高位である一品となり式部卿宮に任じられ、第一皇女である脩子内親王もまた一品に叙せられている。その母后としての定子の重みは崩御後も揺らぐことはない。

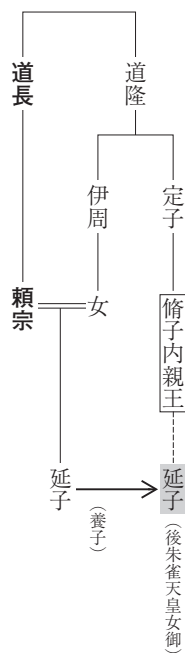
第二は、定子遺児への彰子・頼通、そして詮子らの肩入れである。巻八「かかやく藤壺」〔四〕では道長女の彰子が敦康親王の養母となり、愛育することが描かれる。『栄花物語』記事では寛弘元年（一〇〇四）に位置するのであるが、『権記』からは長保三年（一〇〇一）八月三日には既に養子関係が成立していることが窺い知れる。さらに巻十二「たまのむらぎく」〔二六〕には、敦康親王と具平親王女の結婚の記事がある。長和五年（一〇一六）と読める箇所記されるが、『御堂関白記』によれば、長和二年（一〇一三）十二月十日のことである。敦康親王室となった具平親王女の姉・隆姫は、道長の嫡男・頼通の正室であり、これによって敦康親王は頼通と相婿となる。

これらは史実に即して『栄花物語』が描いたものであるが、他に、一条天皇母後の女院詮子が、その誕生時に母定子を失った媛子内親王を引き取り愛育するさまを、巻七「とりべ野」〔一〇〕〔一五〕〔二二〕が繰り返して描く。ただし、他の歴史資料に見えないもので、これについては『栄花物語』が創作した可能性がかなり大きいのではないかと思われる。

第三は、長じた敦康親王と脩子内親王の二人が、道長の一家と不可分に関わっている状況である。これは『栄花物語』の続編となるが、巻三十四「暮まつほし」〔一〕に、頼通が敦康親王の女・媛子女王を養子とし、後朱雀天皇に入内させる記事がある。長暦元年（一〇三七）時に置かれるが、これは史実の通りである。この時点で妙齢の女の女がいよいよ頼通は妻・隆姫の姪を養女とし、後宮を押さえようとしたのである。



また巻二十一「後くゐの大将」〔二五〕は、万寿元年（一〇二四）三月脩子内親王の出家記事であるのだが、ここに脩子内親王が頼宗（道長男）の女・延子を幼くより養子として記されていることが記されている。次の系図に示すように脩子内親王にとつて延子は伯父の孫ということになり、その血縁に拠るのであるう、『栄花物語』はこの年に延子九歳ほどと記す。



さらにこれも続編となるが、巻三十四「暮まつほし」〔三五〕では、頼宗は延子を養母脩子内親王の異母弟・後朱雀天皇に入内させる記事があり、史実と齟齬することなく、長久三年（一〇四二）として描かれている。頼宗は道長の正室・藤原倫子腹ではなく、源明子を母とする。入内を見据え、早くから延子を内親王の養女とすることで箔づけを期していたと思しい。

こうして『栄花物語』を定子の残した敦康親王・脩子内親王に着目して眺めれば、中関白家の血筋は道長一家と絡み合っており、明らかであった。なお、敦康親王は寛仁二年（一〇一八）に二十歳で薨去するが、脩子内親王は永承四年（一〇四九）に五十四歳で薨去、媛子女王は長暦三年（一〇三九）に二十四歳で世を去っている。『栄花物語』正編が書かれたとみられる長元二年（一〇二九）～六年（一〇三三）に脩子内親王・媛子女王は生存しているのであり、『栄花物語』正編の作者がそれに対して一定の付度をするのはきわめて当然である。物の怪として出現する定子が『栄花物語』に描かれることは、実はあり得ないことなのであった。

結

以上、中関白家の人物、特に定子を中心に『栄花物語』正編の叙述の特徴を考察してみたが、それを描く筆致には、自ずから制約があったことは疑いない。なお付言すれば、定子周辺で成立した『枕草子』と『更級日記』の関わりについては、和田律子氏の論考「頼通文化世界における『枕草子』撰取の様相―更

級日記」を中心に^(注17)」が指摘をなしている。『更級日記』は頼通文化圏で書かれたものであり、本稿で見てきた背景を考えれば、それは十分蓋然性があったのである。

そうすると『更級日記』の作者が目にしたのは、どのような『枕草子』であったのが気になるところだが、ここで伝能因所持本『枕草子』奥書^(注18)の記載が思い起こされてくる。

枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世にはありがたき物なり。

これもさまざまではなけれど、能因が本と聞けば、むげにはあらじと思ひて、書き写してさぶらふぞ。……さきの一条院の一品の宮の本とて見しこそめでたかりしか、と本に見えたり。

「一条院の一品の宮」は脩子内親王であり、ここに『枕草子』善本が所有されていたことは自然である。そうした本が脩子内親王から養女の延子に伝わり、さらに延子の父・頼宗やその異母兄・頼通の文化圏において享受されたのであろうか。

一方、『枕草子』の物語への影響については、高田祐彦氏が「それほど大きなものではない」とまとめている^(注19)。しかし、『栄花物語』巻七「とりべ野」(三)の以下の記事は看過できないように思われるのである。

内裏わたりには五節、臨時の祭などうちつづき、今めかしければ、それにつけても、昔忘れぬさき君達など参りつつ、女房たちとも物語しつつ、五節の所どころの有様など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにも勝りてをかしう誇りかなるけはひを、なほ捨てがたくおぼえて、二三人づつれてぞつねに参る。

長保二年(一〇〇〇) 出産間際の定子を描く記事の間に挟み込まれたこの一節について、『新編日本古典文学全集』の頭注は、「中関白家没落後を描いた『枕草子』諸段の明るい色調と通じる点は興味深い」とされる。『栄花物語』における『枕草子』の撰取を今一度詳細に検討してみる必要もあるのかもしれない。

ともあれ、「書かれること」「書かれないこと」の峻別は中関白家の描出に固有の問題ではなからう。作り物語でもある程度起り得るのではあるが、實在の人物を物語化し、その子孫たちが読者の一人となる『栄花物語』においてはそれが一層切実であったはずである。如上の視点を持ちつつ、今後さらに『栄花物語』の読解を深めてゆくこととしたい。

注

- (1) 和田英松「榮華物語研究」(『国史説苑』明治書院、一九三九年、初出一九二八年)。
- (2) 道長は巻二にも登場するが、ここでは兄の道隆・道兼と合わせて三人一括で常に「君達」と呼ばれることを加藤静子『王朝歴史物語の生成と方法』(風間書房、二〇〇三年) I 第二章(初出は一九九九年)が指摘する。
- (3) 『栄花物語』の本文は、山中裕・秋山慶・池田尚隆・福長進校注『新編日本古典文学全集 栄花物語①②③』(小学館、一九九五〜九八年)による。一部表記を私に書き換え、人物関係をわかりやすく提示するため、本文に(Ⅱ①②③)のかたちで注記を挿入した箇所がある。なお、引用にあたって同書の章段番号を「」に入れて提示した。
- (4) 「増鏡」本文は大きく古本系と増補系に分けられるが、ここでは古本系によつて考察した。本文系統については拙著『中世宮廷物語文学の研究―歴史との往還―』(和泉書院、二〇一〇年)で論じている。
- (5) 池田節子「紫式部日記を読み解く―源氏物語の作者が見た宮廷社会―」(臨川書店、二〇一七年)第二章、中村成里「『栄花物語』諸本と『紫式部日記』―彰子出産記事再読―」(『日本文学研究ジャーナル』六号、二〇一八年六月)、加藤静子・曾和由記子「『栄花物語』と『紫式部日記』のあいだ―学習院本がひらく、「初花」巻の新たな読み―」(『藤原彰子の文化圏と文学世界』武蔵野書院、二〇一八年十月)、山本淳子「敦成親王誕生時の「御物怪」記事―『紫式部日記』と『栄花物語』、各々の意図―」(同前著)。
- (6) 本文の引用は、藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注『新編日本古典文学全集 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』(小学館、一九九四年)による。
- (7) 本文の引用は、東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記』(岩波書店、一九五九〜一九八六年)により、私に表記を改めた箇所がある。
- (8) 本文の引用は、東京大学史料編纂所編『大日本古記録 御堂関白記』(岩波書店、一九五二〜一九五四年)により、私に表記を改めた箇所がある。
- (9) 近年、山本淳子論文「藤原道長の和歌「この世をば」新釈の試み」(『国語国文』八七巻八号、二〇一八年八月)が道長の歌について、君臣和楽の意味が込められていると解釈しているが、『栄花物語』作者やその読者にはそのような享受されていなかった可能性がある。

- (10) 史実では『栄花物語』と異なることは、倉本一宏『平安朝 皇位継承の闇』(角川学芸出版、二〇一四年) 第四章に詳しい。
- (11) 柴田美穂『『栄花物語』藤原伊周考』(『皇学館論叢』三十二巻三号、一九九九年六月)、伊神絵里「大鏡の逸話―伊周の左遷をめぐって―」(『古代文学研究 第二次』八号、一九九九年十月)、安藤靖治「中関白家鎮魂譜(抄)―諸書に描かれる、主として伊周・定子像の位相から―」(『麗沢大学紀要』八一巻、二〇〇五年十二月)、安藤靖治「同前(その二)」(『麗沢大学紀要』八三巻、二〇〇六年十二月) など。
- (12) 平安時代の物の怪については、藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉』(笠間書院、一九九四年) が詳しい。また定子の物の怪については、山本淳子論文「敦成親王誕生時の「御物怪」記事―『紫式部日記』と『栄花物語』、各々の意図―」(注(5)と同) が考察している。
- (13) 『藤原伊周・隆家―禍福は糾える纏のごとし―』(ミネルヴァ書房、二〇一七年)。
- (14) 敦康親王、脩子内親王の生涯については、下玉利百合子『枕草子周辺論 続編』(笠間書院、一九九五年)(初出は一九八六年)、近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』(風間書房、二〇〇五年) 第三章第一節(初出は一九八八年) が詳しい。
- (15) 平安時代の養女については倉田実『王朝撰関期の養女たち』(翰林書房、二〇〇四年) が網羅的に検討をなしている。
- (16) 頼通の実の女・寛子は長元九年(一〇三六年) 生でこの年わずか二歳。寛子は、永承五年(一〇五〇年) に後朱雀天皇の皇子である後冷泉天皇に入内する。
- (17) 『古代中世文学論考』(二十九集、二〇一四年四月)。なお、『更級日記』の『栄花物語』受容については、拙稿「『更級日記』と『栄花物語』」(『語文と教育』三十一号、二〇一七年九月) において検討している。
- (18) 本文は、松尾聰・永井和子校注『日本古典文学全集枕草子』(小学館、一九七四年) による。
- (19) 高橋由記「脩子内親王の文化圏―『枕草子』の善本所蔵に関連して―」(『大妻国文』四四号、二〇一三年三月) に関連の問題が論じられている。
- (20) 枕草子研究会編『枕草子大事典』(勉誠出版、二〇〇一年) 第二章「作者と作品」II-4「作品への影響」のC「物語」。

The Nakano Kanpaku Family in *Eiga Monogatari*: What is Written and What is Not Written

KOJIMA Akiko

Eiga Monogatari is a tale that depicts the story of Fujiwara no Michinaga in detail as he wielded his political power and ushered in extreme prosperity. However, the background of the tale also contains vivid descriptions of people sinking into despair after being defeated by Michinaga. This is represented by the ‘Nakano Kanpaku family’, namely, the family of Michinaga’s eldest brother, Michitaka. There are a considerable number of accounts that depict Michitaka’s sons, Korechika and Takaie, in particular, as well as Michitaka’s daughter, Teishi, who became the Empress to Emperor Ichijo and the Imperial prince and princesses that Teishi gave birth to; it can be perceived that the author of *Eiga Monogatari* was greatly interested in the Nakano Kanpaku family.

This paper extracts and analyses the depiction of the Nakano Kanpaku family in *Eiga Monogatari* and clarifies the characteristics that can be found in the descriptions therein. Moreover, there are areas in *Eiga Monogatari* where accounts thought to have been written in relation to this family are missing, and I also include a study of the possible intentions behind this aspect. By considering both ‘what is written’ and ‘what is not written’ in relation to the Nakano Kanpaku family, I attempt to bring an orientation of the historical descriptions of *Eiga Monogatari* to the surface.